



包んで伝える心

～日本橋の和紙の老舗・榛原の
貴重な聚玉堂コレクション拝見～



2010年1月30日(土)、中央区・日本橋にある文化3年(1806年)創業の和紙の老舗・日本橋榛原にて、江戸東京再発見コンソーシアム主催の伝統文化工芸講座 五感で学ぶ江戸の粋「包んで伝える心」を開催し、午前午後と合わせて16名の方々にご参加頂きました。江戸時代の和紙コレクションから垣間見える「江戸」ということで、貴重な和紙・版木等を所蔵する「聚玉堂文庫」のコレクションを中心に、日本橋榛原の中村晴子会長からお話をいただきました。



午前中のプログラムでは、和紙の貴重なコレクションを所蔵する「聚玉堂文庫」から、普段目にするのできない、古い熨斗や版木等を特別に見せていただきました。「熨斗」の内側の和紙にこだわる「江戸っ子の洒落」の感覚ということで、熨斗用の和紙の見本帳の繊細な刷りを見せてもらおうと、参加者の皆様から思わずため息が漏れていました。「包む」という事が、日本人にとって単に包装だけではなく、清めや感謝、哀悼など気持ちをより深く表わす重要な意志表示であることなどを講演いただきました。

午後のプログラムでは、聚玉堂文庫の学芸員である長谷川由華さんからもお手伝いいただき、実際に榛原製の和紙を使って、日常生活で使える和紙の活用方法として、室町時代から続く「折形(おりかた)」の講義をしていただきました。実際に、何にでも応用できる「万能包み」や、ちょっとしたお金をお返すのにも便利な「ぼち袋」、日常生活でも使える「箸包み」、御来客の際にも喜ばれる「残菓包み」など、現代でも知っていると便利な和紙を使った折形を教えていただきました。

